

---

# Holonic Concerto

神城水都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Holonicon Concerto

### 【Zコード】

N4420A

### 【作者名】

神城水都

### 【あらすじ】

歪んだ空間を修復する事を生業とする修復士。そして、その名家に生まれたセレとカイトの姉弟。一人は今日も各地で空間を修復する、駆け出し修復士。しかしこの一人には、誰にも言えない秘密があつた……。

## 序章

人間は人間界に。  
悪魔は魔界に。

それは、子供でも知つてゐるこの世界の理。

でも、時々その理は破れる。例えば相手を意図的に呼んだ時。それは、正当な手続きを踏めば咎められない。

そして、呼ばれていないのに向こうの世界へ行つた時。その時は、『咎』として、それなりの対価を支払わねばならない。

しかし、それを防ぐ方法があるのも、また事実。その方法とは……。

## 第一章・セレとカイトと……

どこまでも平らな緑色の絨毯。否、大草原が広がる平地。空の蒼と、緑の境界線に、一本の線が続いていた。それは、線路だつた。

その時、線路の上に乗つかっていた小石が、ボトン、と落ちる。レールの振動が大きくなり、周りの空間が揺れた。先程から続いていた、ガタン、ゴトンという音は、次第に大きくなり、ゴー、という音に変わる。直後に、汽車が通過した。

今、通り過ぎた汽車内部のあるコンパートメント。そこには、一人の子供が乗っていた。

「なあ、後どれ位で着くと思う？」

退屈していたのだろう。子供の内の片方、少年の方が同乗者に問い合わせる。その声は、声変わりしたてだった。

「うーん、一時間つてところじゃない？」

いくらか高い声が答えた。少女の方だった。

「うえ、まだそんなに？来るんじゃなかつたぜ。全く」

少年が、自分の黒髪をかきむしりながら言つ。それを見て、少女が眉をひそめる。

「おい、カイト。そんな事言つな。あつちはあれでも、死活問題なんだぞ」

新たに、三人目の声がした。しかし、その姿は確認出来ない。そんな事お構いなしに、カイトと呼ばれた少年は牙をむく。

「フェルクには言つてねえ！勝手に口出しすんな、悪魔！」

端から見れば、少年が少女に怒鳴つているように見えるだろう。

「ムツ。何度言つたら分かるんだ。俺は悪魔ではない。魔族だ」

しかし、発せられたその声は、まるで少女のものではない。落ち

着いた低めの声。

「なあセレ。こんのバカフェルク、どう見たつて悪魔だよなあ」  
カイトは、視線を少し上げて、セレと呼んだ少女の方を向きやつた。

その目は、

「肯定して」

と語つていたが、

「カイト、喧嘩しないでよ。もお、何で仲良くな出来ないの？」

セレという少女は、こう返した。

途端にカイトは不機嫌になる。

「何だよ。セレはいつもフェルクの肩持つじやん。セレは実の弟より、悪魔の方がいいってわけ？」

「悪魔じゃない」

すかさず入るフェルクの訂正。

「二人とも、仲良くしてよ。特にカイト」

セレは、溜め息混じりに言つ。

「それに、今から仕事だし。支障が出ても知らないから」

仕事。その言葉に、カイトは押し黙つた。

それもその筈。なぜならそれこそが、一人 + ガここにいる理由だから。こうやって、何時間も汽車に揺られているのも、全て仕事のせいに他ならない。

「あー、何で修復士の人口つて少ないんだよ。だからこんなに遠くまで行かないといけないじゃないか」

修復士。それは、二人の職業であり、身分でもある。

この人間界は、魔界と接している。

普段一つの空間は閉ざされている。しかし空間の境目といつのは、まるで布みたいに、整えても整えて必ず歪みが生じるのだ。  
歪みはいつか壊れ、そこからは、招かれざるモノ『咎』が侵入

する。

『咎』とは、呼ばれていないのに、人間界へやつて来た悪魔の事。その悪魔達は、魔力が本来の半分しかない。そして時間が経つと、理性を失い、『咎』となり果てる。

『咎』は人間を襲う。人間にしかない『靈幹』を得るために。そこで、登場するのが修復士。彼らは、歪み、壊れた空間を修復する。

その能力は、誰もが持っているのではない。魔法とは、また別的能力だった。

セレとカイトは、数少ない修復士の名家・ルグレ家の生まれだつた。

セレは今年で十五歳。青みを帯びた長い黒髪に、血のよつに紅い瞳を持つ。

ちなみに、紅い瞳の事は、龍眼と呼ぶ。それは、今は絶滅した龍に由来する。龍の瞳も紅かつたらしい。

龍眼は、僅かな魔力でも察知する事が出来る。だからこそ重宝されている。

カイトは十四歳。セレより黒いボサボサの髪に、金色の瞳を持つ。カイトは、末っ子でありながら、ルグレ家の次期当主となる事が決まっていた。それはひとえに、潜在魔力が大きいからである。ルグレ家というのは、潜在魔力の大きな家系である。セレの魔力も人並みより大きかった。

しかし、カイトの魔力は、セレさえも遙かに凌駕している。その大きさは、悪魔並みである。

「そうだよね。何で修復士つて少ないんだろ。フェルクは分かる?」  
セレが、膝の上の乗つかつた何かを撫でながら言つた。

そこにフェルクはいた。常人には見えないであろう銀の毛並み。しかし、セレとカイトの目には、はつきりと映し出されている。

「さあな。でも俺達魔族には、空間を操れるヤツはない。」

そう、フェルクは、人間界では一般的に（本人は否定しているが）悪魔と呼ばれている、魔界の住人だった。

今は、他人に見られないよう、体長五十センチ程の妙な生き物の姿に身をやつしている。しかし、その金色の瞳は、紛れもない悪魔の証拠だ。

「ふーん。フェルク、分からぬのか」

カイトが言った。その顔は、少し嬉しそうだった。

フェルクは反論する。

「当たり前だ。俺だつて只の魔族だ。知らない事の一つや二つだってあるさ」

「一つ二つねえ」

また始まりそうな言い争い。セレは、傍観する事を決めた。今度は、楽しそうに聞いている。

「何が言いたい」

「言つてもいいの。ほら、この前のアレ……」

「そ、ソレは言うな！」

「ソレって？」

「あ、セレ。あのなあ

「おいつ！」

セレとカイトとフェルク。この三人は、いつも一緒だった。

それは、五年前のあの時から……。

## 第一章・セレとカイトと……（後書き）

初めまして。神城です。  
さて、初の連載です。難しいですね。どこまで書けばいいか迷いました。でも、小説を書く事つて楽しいです。  
ちなみに、Concertoは、「コンサート」ではなく「コン  
チェルト」とお読み下さい。

まだまだ未熟ですが、今後ともよろしくお願ひします。

## 第一章：初めての都会

「シュー、ガッコン。

またしても大量の煙を吐き出しながら、汽車が停止した。ドアが開き、人々が下車していく。

その人の群れの中に、セレとカイトと一緒にいた。

「ふう、やつと着いた」

プラットホームに足を着けたカイトが、ペキペキと体の筋を伸ばしながら言った。

「流石に汽車で五時間つていうのはキツいね」

続いて降りたセレが、ウワーンと背伸びをしながら言った。

「そうか？ そんなに長かったか？」

セレの肩に乗っかつたフェルクが、ケロッとした表情で言った。

その言葉に姉弟は、明らかな非難の表情を浮かべてフェルクを見つめる。

「うわ、あれだけ長時間だつたのに、退屈じゃないなんて」

「流石長生きだね。二五〇歳」

「人間だつたらお年寄りだぞ」

よほど退屈だつたのか、いつもは諫め役のセレまで文句を言ってくる。その口調には、恨みがたっぷり込められていた。

「待て。俺は魔族の中では若いほうだ。……つていうかお前ら、声を落とせ。周りの人気が不審がっているぞ」

気づかなかつたらしい。あつ、と声を上げながら、二人は互いに顔を見渡した。

周りの人にはフェルクが見えていない。何も無い空間に話し掛ける

二人は、はつきり言つて不審者だつた。

「全く。気を付ける。俺がいる事、バレたらヤバいんじゃないか？」

「それはフェルクがいけないんだる。フェルクが何も言わなかつた

らバレない」

カイトは豪語した。

「よし、フェルク。オレ今からお前をシカトする！話しあげても無駄だかんな」

悪戯を思い付いた子供のように顔を輝かせるカイト。

フェルクも、何かを思い付いたらしく、ニヤリと笑う。

「じゃあ、俺が何を言つても気にするなよ」

「あつたりまつ……つて、今のは無し！——カウンントだぞ！」

ついつい答えてしまつたカイト。

セレは、

「違うトコでやつてよ」

と、小さく呟く。その言葉が二人に届く事はなかつた。

一方カイトは、スタスターと早足で歩き出す。フェルクは、早速からかっていた。

「おい、カイト」

「……」

無言。

「じつちを見ろ」

「……」

無言。少し顔を背けた。

「諦める。お前はじうせ負ける」

「……」

無言。こめかみがピクピク動く。

「前から思つていたんだが、お前バカだろ」

「……」

無言。握り締めた拳が、わなわなと震える。

セレは、弟の我慢強さに、感度さえ覚え始めてきた。

フェルクは、更に置み掛ける。非情にも、小さくボソッと呟いた。

「……インヒニカイト……」

「……！」

とうとう爆発。カイトは般若の如く顔を歪ませ、大きな声で吼えた。  
「こんのバカフェルクう！その名前だけは呼ぶなー！」

辺りを行く人が、その声にギヨツと振り向く。勝負は、フェルクが勝つた。

「カイト！それにフェルクも！」

セレが叱る。不審な行動は、控えた方がいいからだ。

「だつて、フェルクの野郎。あの、ダサくて変で付けた人とそんな名前の人品性が疑われるような名前で呼びやがった！」

カイトは、怒りに震えながら言った。

インヒニカイト。カイトに言わせれば、ダサくて変で付けた人とそんな名前の人品性が疑われるような名前は、彼の本名であり、そして禁句である。

セレは何回目かの、大きな溜め息を吐く。こんなにじょっちゅう吐いてたんじや、幸せは、とっくに逃げ出したんだろうな、と思いながら。

駅を出た時、街は既にオレンジに染まっていた。  
道行く人の影は長く、皆帰路を急ぐ。夕方独特の喧騒に包まれている。

その中に、ポツンと取り残される様に一人はいた。

「えーと、この街でいいんだよね……」

「間違つてはないと思う。ホラ、芸術の都・セリアスシティつてあるし……」

戸惑うように確認しあう一人。どうやら、間違つてはいなによう

だ。

しかし一人は、

「あー、でつかいなあ……」

「今日中に『フォウンテン』っていう宿にたどり着けないと思つんだけど……」

初めて見る大きな街に、ただただ圧倒されていた。

しかしそれは仕方がない。二人が住んでいるのは、ドが付くほど  
の田舎。

先代ルグレ家当主は、国の何処へでも行きやすいよう屋敷を国  
ど真ん中に構えたまでは良かつた。

しかし、如何せんそこは山に囲まれた田舎だったのだ。

そして現在、国の南東に位置するセリアスシティは、別の修復士  
が受け持つている。しかし、その修復士は今、別の地方へと赴いて  
いるらしい。

そこで、急遽ルグレ家に白羽の矢が立つたのだった。

草木を遊び相手に育つた一人にとって、初めての都会。大きな建  
物、数々の店、レンガの広い歩道、そして人・人・人。

言葉を無くした一人、フェルクが言った。

「そうか？ そんなに大きいか？ 僕が育つた魔界の都市のほうは、こ  
れより大きかつたぞ」

「えつ、これより大きな街があるの？」

「嘘だろ。こんな悪魔の言うことなんか信じるな」

「魔族だ」

またしても始まった、辺り構わずの言い争い。

「おい、お前らこんなことしている場合か？ 今日中に着かなきやな  
らないんだろ」

「ああ、そうだった」

嫌な事を思い出したように呟つカイト。

「とりあえず、そちら辺の人に聞いてみる？」  
しつかりとした口調で尋ねるセレ。

「それがいいんじゃないか？」

フェルクはそう言った。

かくして、田舎っ子一人と、自称都會育ちの魔族の、宿探しの旅  
(?)が始まった。

## 第一章・初めての都会（後書き）

ああ、中途半端で終わつた（笑）

今書いている短編が終われば、いつでもまた沢山書きます。

出来れば、感想をお寄せ下さい。

## 第二章・広場へ

それから、かなりの時間が過ぎて、三人は、宿屋にいた。

「あー、疲れた」

一つあるベッドの、窓際の方にダイブするカイト。もう、すっかり夜も更けている。

「都会つてさ、何でこう物で溢れてんだろ」「眠たいのか、欠伸をしながらセレが言う。

「だよなあ。建物に囮まれてると、落ち着かないし」

うんざりした口調で話すカイト。そして、ここへ来た時の事を思い出していた。

時を遡る事約五時間前。二人（+）は、すっかり迷っていた。

「ねえ、ほらアツチ」

「うお、何アレ？」

「食べれるとと思う？」

「死んでも知らないぞ。ってかあそこ、欲しいー」「あつ本当」

しかし、まるで緊張感も危機感も無い一人。

「……オイ、そんな事してる暇あるのか」

そんな二人に、見かねたフェルクが、呆れ顔で言う。彼は、保護者を自認していた。

「あつ、そうだつたね」

「オイ、そんな大事な事は早く言え」

やはり緊張感の無い二人。

フェルクは、もう何も言うまい、と決めた。

それから約一時間。

「ハアハア、多分、ここだと思う。……『フォウンテン』……」

「フウ……やつと着いたの……？」

やつたー、と力無く喜ぶ一人。ようやく探していた宿が見つかってらしい。

「最初から、キッチンと探せばすぐ見つかったんじゃないかな？」

やはり呆れた調子のフェルク。

カイトは、そんなフェルクを睨み付けた。

「何だよ、こんな所初めてなんだからしようがないだろ」

田舎育ちの二人にとって、都会とは見るもの・聞くもの全てが珍しい。そして疲れる。

最初の方こそはしゃぎ回っていた一人だが、すでに飽きて、もうクタクタだったのだ。

そして今に至る。

「明日は仕事だろ？ もう寝る」

フェルクが言った。

「確かに眠い……お休み」

欠伸をしながらセレが言う。連られてカイトも欠伸をした。

カイトは窓際のベッドへ。セレはドア側の方に入り込む。ほどなくして、規則正しい寝息が聞こえ始める。

フェルクは、そんな二人を一晩中見ていた。いつもより少し優しく、少し穏やかな瞳で、ずっと見つめていた。

翌朝。

「……というワケで、つまりこの事が世界規模の……経済効果が、だからなんたらかんたら……」

セレとカイトとフェルクは、市長宅の応接室にいた。

床には、高級そうなフカフカした絨毯が敷き詰められ、大きな暖炉の傍には、鎧や剣などのコレクションが並ぶ。はっきり言って、趣味が悪い。

セレは、田の前で既に三十分も語り続けるクライアントを観察した。

暑いのか、ジャケットは着ていない。シャツにピンク色のネクタイを絞め、出っ張った腹部のため、ズボンがずり落ちないようにサスペンダーで留めていた。

視線を上げると、眼鏡を掛けた少し白髪混じりの頭が田に入る。生え際が後退し、額を脂汗が光る。

隣で、同じく退屈そうにしているカイトも、いつかはこうなるのだろうか？

その想像に恐ろしくなったセレは、チラリと見た映像を忘れる事にした。

カイトの先に見えるのは、動物の頭部の剥製。生氣の感じらんないそれの田にはめ込められたガラス玉だけが、唯一光を放っていた。

セレは、視線をずらした。自宅にも掛かっているが、あの剥製は昔から嫌いだ。特に、あの目が怖かった。

「……と、いう事は我が……それがつまり……芸術の都という点に於いて……」

セレは、この男のどこが芸術だらう、と胸中で呟く。

フェルクは、我関せずとばかりに、市長の隣で体を丸めて眠つている。後で叩いてやろう、と心に決めた。

ふと横を見ると、カイトと田線がぶつかる。

(オイ、あの親父。まだ終わらないのかな?)

カイトが目で話しかけてきた。同じよう~~田~~に田線で返す。

(カイト、聞いてみたら?)

(えー、オレ? 嫌だよ。話、全然聞いて無いし。セレが聞けよ)  
(何やってたの? もう、しようがないなあ)

セレは、一度グッと力を込めた後、勇気を出して尋ねた。

「あの……依頼内容とはつまり、西区のサン・リトロ広場に出現した歪みの修復、という事ですね?」

そこまで一心不乱に語っていた男は、口を出された事に、眼鏡を

搔き揚げながら、不機嫌そうに答えた。

「まあ、そういう事ですね。というわけなので……」

「では、今から参らうと思います」

再び始まりそうな熱弁を遮つて、セレはきつぱり言い、立ち上がつた。カイトも、

「お邪魔しました」

と、立ち上がる。

市長がカイトの方を向いた隙に、セレはフェルクを一発殴つた。  
「痛つ。……何だ何だ？」

「も、もう行かれますか？」

背後からそんな声が聞こえたが、二人はやんわりと無視し、颯爽と部屋を出た。

市長宅の豪華な門を出た一人は、凝り固まつた筋肉を伸ばした。あまりに長時間聞いていたため、体中が軋んでいた。

「あー、それにしてもあの話、長かつた」

「あつ、どれ位長かつたか、時間測れば良かつたなあ。勿体無え」

「おい、セレ。俺に対する謝罪は無いのか？」

「旦那様のお話は、いつも長いですからね。先程のは、短い方ですよ」

「ふーん、そうなんだ。あのオッサン、話のネタが尽きないのか？」

「……って、お前誰だよ？！」

いつの間にか、会話に加わっていた青年。彼に気付いたカイトは、驚いた声を上げた。

「申し遅れました。私は案内人の、エリック・スバルーです。エリックとお呼び下さい。旦那様から、お二人を広場まで連れて行くよう言われました」

エリックと名乗った青年は、自己紹介しながら、につこり微笑む。セレとカイトは、顔を見合せた。

「あつ、初めてまして。セレーノ・ルグレです。セレでいいです」

「どうも。カイトです」

互いに名乗る。カイトは、本名を言わなかつた。

「ヒックさん。広場までは遠いですか？」

「いや、歩いて行ける距離ですよ。それでは、私に着いて来て下さい」

そして三人は、歩きだした。

## 第三章・広場へ（後書き）

お久しぶりです。こんにちは。

えー、前回から大分時間が経つてしまいました。  
それというのも、寮に入ったからなんです。自由時間が寝る前の  
一時間だなんて……orz

愛読している方がおられるかは知りませんが、これからもよろしくお願いします。

## 第四章・修復士の仕事

サン・リトロ広場を田指して歩く三人。エリックが、観光がてらに色々と説明する。

「あそこに見える教会は、魔界の宮殿を模して建築された、といわれております。旧暦九五一年に起きた戦争でも、あそこは炎に包まれることは無かつたそうです」

や、

「あちらのホテルは、セリアスシティー有名な『フォウンテン』です。お二人共、昨晩はあそこにお泊まりになったと聞いております。今は有りませんが、その名の通り、それはそれは見事な噴水が有りました」

など、逐一と説明しながら歩く。

カイトは、そんなエリックにすっかり懐き、「へえ、じゃああそこは、そんなに古いんだ

や、

「わっすげえ。あの銅像は？右から二番目の、変な帽子を被つた変なオッサン」

など、色々な質問をしていた。

セレは、そんな一人の少し後を歩いていた。その肩に乗ったフルクと、ひそひそと会話をしている。

「魔界の気配がする。そろそろかな？」

「ああ。油断はするな。『咎』はいか？」

「それは大丈夫。いたら分かるから」

セレの顔つきは、既に修復士のそれだつた。

三人はやがて、レンガ敷きの、大きな広場へ辿り着く。妙な氣に満ちていた。

「ここが、サン・リトロ広場です。毎日、沢山の人人が利用しており

ます」

今は曇時という事もあり、それなりに人がいる。

そして、人だかりが出来ている所が、一力所あつた。そこから、魔界の気が漏れている。セレとカイトは、顔を見合せながら頷いた。

「エリックさんは、もう少し離れていて下さい。周りの人にも伝えて下さい」

「行くぞ、セレ」

そう言い残して、二人は走り去る。残されたエリックは、セレに言われた事を、早くも実践し始めた。

「今日は、どっちがやる?この歪みは、それ程大きく無いけど」

「うん、そうだなあ。頼むわ。俺は後ろで見とく」

手を合わせながら頼むカイト。気になる事をあつたので、セレも承諾した。

「それが賢明な判断だろ? お前が修復するより、セレの方が確実だ」

「オイ、お前は黙つてろ。自分じゃ修復出来ないくせに」

そんな会話をしながら、走る一人。

人だかりまでやつて來た。

「すいませーん、下がつて下さい。修復士です」

セレが、人を搔き分けながら叫ぶ。そして、胸元から、何かを引っ張り出した。

カイトもそれに続く。

「はーい、どいたどいた。危ないですよ?あつちまで下がつて下さい」

そしてやはり、胸元から何かを引っ張り出した。

野次馬たちは最初、

「あ?何だ何だ?」

「修復士だとよ」

「こんな子供がか？嘘だろ」

と言つていたが、二人が掲げている物を見て、

「なんだ。本物か」

と、ゾロゾロ動き出した。

一人が引っ張り出したのは鎖で、その先に小さな金色のメダルがぶら下がっている。

これは、修復士免許所有者の証である。表には隣り合わせの人間界と魔界の模様が、裏には一人の生家であるルグレ家の家紋と二人の名前が、それぞれ彫つてあつた。

これを出せば、どんな場所でも、修復士だという身分証明になるのだ。

野次馬たちが去つた後のその場所には、“立ち入り禁止”と書かれた黄色いテープが張り巡らされているのが見える。更に、セレやカイトみたいな見る目のある者には、歪んだ空間が見えるだろう。

「セレ、頼んだぞ。俺達は後ろにいるからな。何かあつたら、すぐ

に呼べ。あと、念の為に結界を張つておく」

セレの肩からヒラリ、と飛び降りながらフェルクが言った。

「うん、分かった」

セレの状態を確認した後、カイトと共に下がる。

セレはそれを見届けてから、歪みに向き直る。一度深呼吸して落ち着き、手をかざす。目を瞑つて、静かに言葉を紡ぎ出した。

フェルクが張つた結界の中で、カイト達は静かに見守つていた。セレの口から紡がれる数々の単語は、一つ一つ意味のある言葉へと構成され、歪みを捉えていく。一つの問いは、一つの答え 空間の修復という答えへと結び付く。

カイトは、目と耳をフル稼働させ、姉の姿を凝視した。

空間の修復においては、セレの方が上であった。カイトは、いつ

かはルグレ家を継ぐ身である。その極意をその極意を学ばなければならぬという事を理解していた。

一方、修復を続けるセレは、異変を感じていた。先程気になつた事が、益々大きくなつていいく。

その龍眼が捉えた事実は、『咎』がいる だつた。

セレは、詠唱の速度を早める。間違い無い。この歪みを通つた『咎』が、魔界から再びここへと向かつてゐる。

「こちらが早いか、あっちが早いか。

後ろの一人に呼びかける事は出来ない。詠唱を止めれば、また最初からやり直さなければならぬからだ。

セレは、二人がこの事に気付いてくれるよう祈つた。

ハツと顔を上げるフェルク。

「オイ、気付いたか？」

カイトを向きながら言つ。

「『咎』だ」

「えつ……本当だ」

カイトにも、ようやくその存在を捉える事が出来た。

「修復には、もう少し時間が掛かる。どうすんだ？」

カイトが問い合わせると、フェルクは走り出しながら言つ。

「何をボサツとしている！走れ！」

その言葉にムツとしたカイトだつたが、素直に走る。その言葉は正しいからだ。

フェルクの銀色の毛並みは、すぐに小さくなつていった。

最後の最後まで詠唱しようとしたセレの目に、空間を貫く鋭い爪が見えた。そしてそれは、修復仕立ての空間を引き裂く。

『咎』が現れた。遠巻きに見ていた見物人から、悲鳴が上がる。

元は悪魔だつたその『咎』は、黒髪や金色の瞳など、各所にその名残があつた。しかし、大きな爪と牙、変形した体や体中から出た角など、もはや別物である。

その悲鳴に『咎』が、セレの存在を見つけた。そして爪を振り上げる。

「セレ…」

ドンシ、シユツ、ザザツ！

間一髪、フェルクがセレを突き飛ばした。一瞬前までセレの頭があつた場所を、『咎』の爪が突き抜ける。

標的を逸れた爪は、セレの左腕をかすめた。そこに一本の紅い筋が走る。

「大丈夫か、セレ…？」

セレを庇うように『咎』に向き合つたまま、フェルクが言つ。

「ん…うん、なんとか…」

「下がつてろ」

そこへ、遅れてカイトがやつて來た。

「セレ、怪我は？… よし、後はまかせとけ！」

そう言つて、『咎』に対峙する。『咎』の方も、ターゲットをカイトへと変えた。

それを見て、加勢しようかと一瞬迷うフェルク。

しかしカイトならば、一人でも『咎』と渡り合えるだろう。そう判断し、フェルクはセレの傍に駆け寄つた。そして、魔法で出血を止める。

「ありがとう…」

「ああ。カイトのが終わつたらどうする？修復出来るか？」

「大丈夫。任せて」

一方『咎』と向き合つてゐるカイト。彼は、じりじりと間合いを

取りながら、隙を伺つていた。

セレにはフェルクが付いているので、大丈夫だろう。それに、悪魔の半分の魔力しか持たない『咎』は、カイトの敵ではない。

『咎』が、腕を振りかぶつた。素早くそれを見極め、防御壁を築く。振り下ろした『咎』の爪は、防御壁に阻まれた。

「へつ、そんなんじや効かねえよ！」

叫びながら走り、防御壁を解くカイト。同時に、魔法で炎を創り出した。

「お前も、今度からは考えて人間界に来いよな。“今度”は、もう無いけど」

そして、炎を『咎』へと叩き付けた。

「これでトドメっ！」

カイトの創り出した炎は、『咎』を飲み込む。

「ギィヤアアアアアア！」

という悲鳴と、勢い良く炎がばぜる音。見ている見物人からも、感嘆の声と、興奮したような囁きが聞こえる。

「へへつ。楽勝！」

カイトは、にっこりと笑つた。

少し前、カイトの炎が『咎』を飲み込まんとしている時。

「……！」

セレは一人、心の中で、声にならない悲鳴を上げていた。そして目を背ける。『咎』は、消えていた。カイトが誇らしげに、微笑んでいる。

それを見て、胸が痛んだ。

頭では分かつていて、自分は人間。『咎』は敵で、倒すべき者。

それでも、考えらざにはいられない。なぜあの悪魔は、人間界へ来たのだろう。『咎』になる事は、百も承知だつたろうに。

セレは思う。目の前にいる、銀色の小さな悪魔は、何を思ったのか。自分の元・同胞に対して、何を感じたのだろうかと。その顔は

見えず、表情は伺えなかつた。

消えていつた『咎』に、祈りを捧げた後、再び開いた空間の修復に取り掛かつた。

セレは立ち上がる。

## 第四章・修復士の仕事（後書き）

こんなに。 神城です。

昨日は午後に時間が出来たので、執筆する事が出来ました。  
前回は、時間が空きすぎてしまつたので、そのお詫びを込めてで  
す。（そのお陰で、文調を忘れました……）

こんな作者ですが、これからもよろしくお願ひします。

ガタン「ゴトンと、汽車が走る。時折煙を吐き出しながら、東へ東へと進む。

最後尾に近いコンパートメントの中に、セレとカイトとフェルクはいた。地平線へと沈み行く太陽によつて、室内はオレンジ色に染まっている。

誰もが無言だつた。詳しく述べれば、セレは膝の上のフェルクを撫で、フェルクは撫でられながら、時折その体がピクリと動く。カイトはシートを丸々一つ使って寝ていた。

尚も東へと進む汽車。

そして日は暮れる。

「お前らなあ。俺が起こさなかつたら、乗り廻していただろ」すつかり夜も更けた山間の無人駅。そこには、頭を垂れた子供が一人と、常人には見えない悪魔がいた。

「はい、すいません」

「次からは気付けてます」

二人の子供 セレとカイトが謝る。

「分かればいいんだ」

フェルクは、飛び上がってセレの肩に乗つた。

「帰ろっか」

セレが弟を振り向きながら言つ。カイトは疲れたー、とだけ言つた。

「ふう、やつと着いた」

大きな屋敷の豪華な玄関を前に、カイトが言つ。勿論この屋敷はルグレ家だ。

「結構遅くなっちゃったね」

セレの言う通り、既に夜も遅く、夜空には三日月が架かっている。

「オレは早く寝たい。疲れたよ」

カイトはそう言いながら、玄関を開けた。

「ただいまー」

「帰りました」

玄関ホールに足を踏み入れる一人。すぐに執事のハワードが出迎えた。

「お帰りなさいませ。セレーノ様、カイト様。お食事はどうされましたか？」

セレは初老の男性を向きやると、テキパキと応える。カイトは眠かつたので、そのやり取りをぼーっと眺めていた。

「夕飯はもう済ませたから。それより、父に報告しなきゃ」

「かしこまりました。ミランダにそう伝えておきます。旦那様は書斎ですよ」

「ありがとう。 カイト、行くよ」

眠りかけていた弟の腕を引っ張るセレと、ハツと我に帰るカイト。ハワードは、二人に微笑んだ。

「今書斎へ行かれると、お二人共お喜びなられますよ」

その言葉に、すぐさまカイトが反応した。

「え、何かあんの？」

「それは、『自分の目で』確認下せー」

「ケチー。教えてよ」

子供のように膨れるカイト。

「カイトー、早く行くよー」

しかしセレに従つて、階段を登りはじめた。

ルグレ家当主の書斎は二階にある。そこまでの道すがら、三人は、ハワードが述べた事について、色々と予想していた。

「何だろ。小遣いとか貰えるのかな」

そう言つてカイトは、セレの方を振り向く。

「違つんじやない？書斎から、三つの魔力反応がある。多分その一つはお父様のだと思うけど。 フェルクはどう思う？」

セレは肩の上のフェルクを向きやつた。フェルクは、ああと言つて話し出す。

「俺にも微かに感じられる。やっぱり一つは、お前らの親父さんだろ」

「後の二つは魔道具？」

カイトは魔力を感知する、という点では一人に劣る。彼には、三つの魔力反応が感じられなかつたようだ。

「ごめん、そこまでは分かんない」

「龍眼でも分かんねえ事つてあるんだ」

カイトは馬鹿にした口調で言つ。一人だけ仲間外れで悔しかつたのだ。

「仕様がないでしょ。龍つて言つたって、所詮は人なんだし。それに、この屋敷には、色々な結界が施してあるんだから」

そうこいつしている内に、書斎の前に辿り着いた。セレがその扉をノックする。

「お父様、セレとカイトが報告に参りました」

すぐに応答される。

「入りなさい」

「失礼します」

その声に、扉を開けるセレ。カイトも後に続いた。するとそこに見えたのは

「兄さん！」

「おっ、兄貴じゃん。義姉さんもいるし」

とある名門修復士の家に婿養子に行つた長兄・ヒミリオとその妻・

ティーナだつた。

「やあ、二人共。久しぶりだね」

「お邪魔してるわよ。セレもカイトも、しばらく見ない内に大きくなつたわね」

少々線の細いエミリオと、お嬢様らしさを感じさせないティーナ。会うのは実に一年ぶりであった。

「それより一人共、まずは報告をしなさい」

兄弟達の父親であるルグレ家当主・ダニエルが口を開く。

「あつ、はい。やはりセリウスシティには、歪みが生じていました。これは私が修復をしました。あと、歪みから『咎』が一体現れました」

すぐさまセレが応える。

「『咎』だと? して、被害は」

ダニエルの問いに、今度はカイトが引き継いだ。

「それは問題ありません。俺が倒したんだ」

ダニエルはカイトの言葉に何かを考える様子だったが、やがてこう言った。

「そうか、二人共、苦労だつたな。今日はもう少し遅い。早く休みなさい」

やつと退出を許されて、カイトはホッとした。もう限界だったのだ。

「失礼しました」

扉が閉まつたのを確認して、エミリオは父の方へと向き直る。

「やはり父上……。各地で歪みが、多発していますね」

「ああ。それに『咎』の動きも活発化している」

「お義父様、あの一人には、いつ告げるのですか?」

ティーナの問いに、ダニエルは逡巡した後、応える。

「もう少し様子を見てみよう。満月までは、今しばらく時間がある

「それにしても、久しぶりだよな。兄貴達に会うの」  
カイトが嬉しそうに言つた。たとえ八歳も年が離れていても、兄は兄なのだ。

「でも変じやない？何でこんな時期に里帰りなんてするんだ？」

セレは、腕を組んで考え始める。

「何でもいいじゃん。俺、明日は兄貴と遊ぼっと。　じゃ、お休み～」

カイトは自室の扉を開け、すぐにその中へ消えた。余程眠たかったのだろう。

「そうだな」

フェルクはセレの肩から飛び降りると、器用に窓枠へと着地した。

「どうしたの？」

セレもフェルクにつられて、窓際まで寄る。フェルクは、空を見上げながら言つた。

「そろそろ満月だ。魔界の動きも、活発になつているだろ？理由はそれに間違いない」

空には紅く、大きな三日月が架かっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4420a/>

---

Holonic Concerto

2010年12月5日11時18分発行